



中朝文鑑
四之五

△ 5
4709
3



5
4709
3



中外文鑑

奏表類

出口天滿宮文

花起請

報恩表

教令類

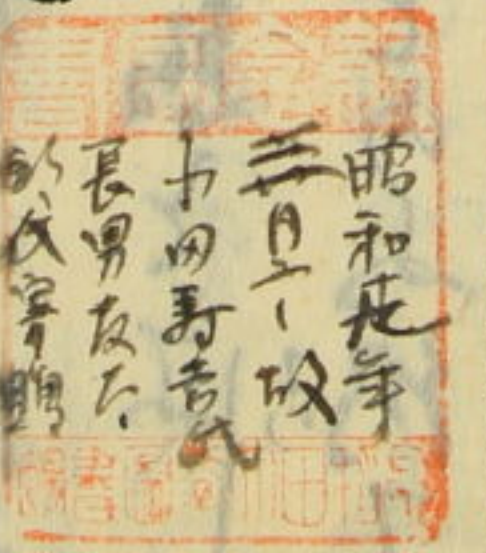
双林寺修石碑教

落柿舎制札

書狀類

谷_二痛_一封_二有_一書_二治_一文_二返_一狀_二隔_一成_二四_一修_二文_一

贈_二左_一采_二老_一人_二書_一之_二洛_一書_二申_一白_二行_一狀



昭和元年
三月一日
十日
長男友
於
氏
子
明

本用文鑑四

天皇表 類ニ入タリ 北等ノ沙汰ハ 匿場ノ法ナランカ 但シ 難波
ノ梅云 羽トハ 宗因門下ノ 行号ナシハ 玄ニ 梅ノ一ニ 守
御セリ

乙類法

カシハトト

とくしよもらふていけりていけりて
いけりていけりていけりていけりて
いけりていけりていけりていけりて
いけりていけりていけりていけりて
いけりていけりていけりていけりて
いけりていけりていけりていけりて
いけりていけりていけりていけりて
いけりていけりていけりていけりて
いけりていけりていけりていけりて
いけりていけりていけりていけりて

ふのくほらわ... 人... せりり... せりり...

ね云此又ハ武城ノ人持傳テ... 然レハ此又ノ教ヲ... 遊逸ノ人... 達ヒカク年... 一キモアラヌニ... 得タリト云... 二ニ遊チノ名... ヲリ 穀ニ類ニ題セルハ...

本朝文鑑四

三

報恩心表

東花坊

忠孝を以て徳を尊ぶる者一して是れ徳を尊ぶる者也
 而して徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也
 忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也
 忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也
 忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也
 忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也
 忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也
 忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也

忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也
 忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也
 忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也
 忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也
 忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也
 忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也
 忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也
 忠孝の徳を尊ぶる者一して徳を尊ぶる者也

お申ありたぬ貴商と其門のありて武つし許六
 あり曲御事ありたぬなるに刀子まふ堂なり鎮西より七
 一橋御舎の謙ふらひよ坂よれ不玉と惟然坊のみひりよ
 尾張より露川あり美濃より戸文あり杜田を橋むり
 のふよあり北枝吾仲と今の會ひく子那者白七老
 けらねりの正秀と難波の親亦と智月と丹の申族
 の信とむまうりて譯と尾張の古門人と石の申賢
 のくくたやしておれりてつと龍行ふんとおれり
 風雅の先達とあふりんやふりて七十二年のらり
 仰のえのなるらりておれりてつと龍行ふんとおれり

あらむとらりておれりてつと龍行ふんとおれり
 御事とらりておれりてつと龍行ふんとおれり
 人のまはりておれりてつと龍行ふんとおれり
 人におおくとらりておれりてつと龍行ふんとおれり
 本を指らむりておれりてつと龍行ふんとおれり
 とおれりておれりてつと龍行ふんとおれり
 すとらりておれりてつと龍行ふんとおれり
 双親とまひりておれりてつと龍行ふんとおれり
 本にほりておれりてつと龍行ふんとおれり
 敬礼よとらりておれりてつと龍行ふんとおれり

報國記の巻之三にありては、其の年十七年の事とせり。
 丁未の年、其の年二十五年の事とせり。其の年二十五年の事とせり。
 其の年二十五年の事とせり。其の年二十五年の事とせり。
 其の年二十五年の事とせり。其の年二十五年の事とせり。
 其の年二十五年の事とせり。其の年二十五年の事とせり。
 其の年二十五年の事とせり。其の年二十五年の事とせり。
 其の年二十五年の事とせり。其の年二十五年の事とせり。
 其の年二十五年の事とせり。其の年二十五年の事とせり。
 其の年二十五年の事とせり。其の年二十五年の事とせり。
 其の年二十五年の事とせり。其の年二十五年の事とせり。
 其の年二十五年の事とせり。其の年二十五年の事とせり。

ありては、其の年十七年の事とせり。其の年十七年の事とせり。
 其の年十七年の事とせり。其の年十七年の事とせり。
 其の年十七年の事とせり。其の年十七年の事とせり。
 其の年十七年の事とせり。其の年十七年の事とせり。
 其の年十七年の事とせり。其の年十七年の事とせり。
 其の年十七年の事とせり。其の年十七年の事とせり。
 其の年十七年の事とせり。其の年十七年の事とせり。
 其の年十七年の事とせり。其の年十七年の事とせり。
 其の年十七年の事とせり。其の年十七年の事とせり。
 其の年十七年の事とせり。其の年十七年の事とせり。
 其の年十七年の事とせり。其の年十七年の事とせり。
 其の年十七年の事とせり。其の年十七年の事とせり。

大用之盛也

狂云此表に教師ノ丹臍ヨリ出テ一女子キヨモモキ端ノ
 戯啖ヲササテ師ノ屈會ハ解了スレ然レハ之國ニ

のりて供佛の料とけくそきく漢掃のたききりし
 とおありぬ向後うけけきよおのそあふのそる像
 碑文の秘伝とまらぬけて信心不還の志とけき
 年くく碑面のまきとあきく月くは供佛の燈と
 けけりくくそるの志とあきく便あくとおほしき
 こくく月上院と利重園は親王の令旨にかつて渡部
 けあうけおほくりておくけ地と施しとけり
 け云北教ハ傳をまかり文法ニ效てて安ニ親王ノ令旨
 け促せり去ハ北書ノ教とあハ年々之月十二日ヲ以テ
 東山ニ聖堂直ノ會式アラントラて承く後東ノ内ハニ

催促せり誠ニ此語ノ名マラシハ誰カ合信ノ至ラ存セ
 然ニ祇園ノ墓金トハ石碑造立ノ時ノ地次々ニ供
 佛ノ料トハ此時ノ香華料ナリけぬニ年月日ノ
 け重子テ信心不還トモ云ハナリ或ハ一巻下ノ葉トハ
 禪語ノ一花五葉ヲ借ウテ万ノニ子ヲ錯綜セシ花
 二虚實ハ音絶ノ意對ト云シ但し出山佛ハ故云の持仏
 十レカ我師ニ對屬アリシヲ再ヒ此寺ニ奉納セリ或ハ石碑
 ノ謎文ナト一軸ノ秘注ヲ内陣ニ殘セル奉曲ハ碑文類ノ下ニ
 但し利重園ハ山莊ノ名ヲ差シテ當時ニ諱ノ恐レアリナリ

本朝文鑑四

落柿舎制札

仍諸奉行

向去来

一 我々の能活しあはるる
 一 世の功徳とていふ
 一 新魚獲らるわあ
 一 大軒とがく
 一 物々しく暮と
 一 魚鳥と
 一 速く決つと
 一 たくと

一 隣り此病態と
 一 大の

右條

和云此令ハ四虚一實ト
 性ハ殊ニ篤實ニシテ
 フ云一ウシテ
 ニ五七事ノ内人
 云一リトフ
 アリテ 鎮西ニ
 仍諸奉行ナリト
 故云羽モ
 稱シ給レハ

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

中書

ね云北北東鑑中ニ在リテ其代ノ人モ感シタリヤ假名
 ノ文法ハ此一ナリモト内藤六依々本ナト軍馬紅服

ノ用ヲ中書シテ多ニ天皇女官ナトノ至ナカラン古ヌラ要
 文トセリ殊ニ痛願ヲ教訓シテ人ニ憎ミ給ヤトハ^{ホカ}及ニ
 義経ノ利登ラ誠メ玉ル五百年前ノ人情ヲモ看破
 スレ然レニ宇成盛ノ憶ニ柄ヲ歎キテ是ラハ生捕ニスレハ
 惟惺ニ千里ノ騰負ヲ知リテ誠ニ實仁大度ノ人ト
 云レシ

法文

蓮如上人

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

身ノ丸果ハアハ成ケリトハ武士ノ本意ノアハレトクタルナト
ハ禪門ニ依例ト云イ我宗ニ瘦我ト笑フ凡雅ノ哀シラ
知ラサルニ如何シ誠ニ此文ノ有難キ所ハ此等ノ詞ヲ文體
トハ見ルヘシ

返帳

山ノ宿

くまをてとらひ来しとあはれははるきき
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ



和云北枕ハ城南ノ第伍ヲニ在リテ其純ノ麻痺ナル文法
ノ卒アル人ハ名書カニモ捨ツキヲ何某ノ知尚ノ金紙
全泥ヨリモ是ニ歸繡ノ光ラ添タル誠ニ流ノ祖タラシハ
むモトモハ書ニ益ニ妙ナル凡推ハ在テノ虚色ヲ知レリ

酒盛皿移文

橘佐坂入道

却ねのる向に福玉をたなふくは喜々山へ南に別荘
あふくふふふふふふふふふふふふふふふふ

の奥より出て比の所の勝負を決せしむるに九月
 此十日にけりといふ所の村に家来ありて陣に可合に所
 ありり村坊より同鏡と名をいふいふに之を言はれん
 とありり一とや次一とを筆にしりてにけりありあり
 のやちのありありのを馬名に解の直言にこれ
 といふの中は道に解にけりては五位の備言と見え
 けりまにぬるに義事ありけりてはさこの見え
 ありけりてはさこの見事ありけりてはさこの見え
 まのありけりてはさこの見事ありけりてはさこの見え
 けりてはさこの見事ありけりてはさこの見え

中子と城南の月よりありけりてはさこの見え
 けりてはさこの見事ありけりてはさこの見え
 池とありけりてはさこの見事ありけりてはさこの見え
 けりてはさこの見事ありけりてはさこの見え
 中より入道ありけりてはさこの見事ありけりてはさこの見え
 てはさこの見事ありけりてはさこの見事ありけりてはさこの見え
 藤原もに打せありけりてはさこの見事ありけりてはさこの見え
 けりてはさこの見事ありけりてはさこの見事ありけりてはさこの見え
 在云此後又ハ虚誕ナレト所ニ文ニ軍ヲ鎮メテ軍書ニ
 異ナルヲ格ラヒ止レ去ハ武茂野以下ハ五ノ石ニ對シ

二叙婉ノ志即ト云ルヨリ汁婉以下ノ次即ニ即ヲ案スレタ
 二福寺ハ作ト云ルハ當國ニ名ヲ知レテ家叙ハ即牛
 ナリトカ然レニ此作者ヲ依履入道ト云ルハ例ニ我師
 ノ任名チカラ其ノ隣國トナレ且シ我師ハ禱ノ庶流
 贈丸栗老人書
 小菴師

中ノ法語ヨリりね老人らむ一我師のり并とてきて
 可ト云石の二子とてしつらし其の子に陸夜あり汝亦り
 過角を竹凡ノ痛よまれつと其ふの能諾とてをり一
 一子子の凡雅とてしつらし其の流ニ至つらし金玉

けりもいふもてねよおしつ詞ありけりいれを栗の
 とろやんをねの控記いしとてしつらし二西本と西方の後
 あるもありしとてあしひしつらしねりしを栗の
 わらふたあつと能諾ハ年々のあ化ありしつらし
 能諾ハ及つとてあ化いふとてしつらしとあけしつらし
 一しつらし老人のいふとあしひしつらしねりしを栗の
 あれしつらしあ化の記とあしひしつらしねりしを栗の
 子のあつとあ化いふとてしつらしねりしを栗の
 人らとてしつらし能諾の中しあしひしつらしねりしを栗の
 ありとてしつらしねりしを栗の

筆跡の如きものなげらるる者も此膝を
今下れば其の静まりたる所も
人向一々の変化もかくの如く
もやあらざる古師の習も
吾月露りの神々も
人向一々の変化もかくの如く
もやあらざる古師の習も
吾月露りの神々も
人向一々の変化もかくの如く
もやあらざる古師の習も
吾月露りの神々も

の如きものなげらるる者も此膝を
今下れば其の静まりたる所も
人向一々の変化もかくの如く
もやあらざる古師の習も
吾月露りの神々も
人向一々の変化もかくの如く
もやあらざる古師の習も
吾月露りの神々も
人向一々の変化もかくの如く
もやあらざる古師の習も
吾月露りの神々も

大明文鑑

向ていふかつかんちふむちふりかひりふむかひりな也
れ云々唐書ノニよハ漢文ニモ在リテ本朝文粹ニモ出セルカ
何レモ卿ノ遠イアリ去レハ此書ハ吾人連寺所ノ當時ニ
過分ノ勵ムルヲ評シテ始ハ落書ニ記ト題セルヲ其後ニ
冷泉系ノ披露ニ及スルハ落書ニ露顯トハムルトソ然レバ
此等ノ古又ハ諸家ノ異説ニ于ケルヲ我々家ニハ秘抄アリ
テ偶々ニイシテ評セルアリ其抄ニ曰先ニ能因ハ春秋
ノ程ヲ經テ万里ニ遙ナル情ヲ讀ミ後ニ賴政ハ其等ノ
詞ヲ借ツテ青紅白ノこまヲ以テ吾ノ次ヲ詠シタルハ
聲言都トハ何ノ向ハ一オアリテモ遠近ノ論ニアラス然レバ

能因ハ風情ヲ讀ミ賴政ハ風姿ヲ詠シテ卿モ親セル所アリト誠ニ
能因ハ出ノ字ヲ以テ吾ニ遠近ノ情ヲ知り賴政ハ見ノ字ヲ以テ
之ニ青白ノ次ヲ見ル本ヨリ詩音連配ハ容情トテ辨テ殊
ニ風姿ノ先ナルヲ知レ但シハ伴入道モ其等ノ秘抄ヲモ知
テ下ラ和歌ノ真意ヲ言メ尤ヤ石等類ノ論ハ寧ニ明ナラシ

申スハねは快

蓬三三居

能七後ニテ流ワリぬ武の秘障トなるをいふ行と
おろくねいしきき方ゆのねりいさのそよのかれ
心もあはしあはしききしききと相と辨と

乙卯月日記と云ふ小願次めりて
 なる一様一云はありしに
 してはなりけり
 志難く其書初と云ふ
 神又云ふ
 下座の
 今秋
 と云ふ
 海

乙卯月日記と云ふ小願次めりて
 なる一様一云はありしに
 してはなりけり
 志難く其書初と云ふ
 神又云ふ
 下座の
 今秋
 と云ふ
 海

考ししれすいれし

れ云此状ハ尾城ニ便ヲ求テ武陵へ書通ノ條状ナリをモ
此書ノ趣ハ後ノ序類ノ下ニ通曉スレ去レハ法善カ鏡
ト此人ハ常ニ致鏡ヲ以テ人ノ五臓六腑ヲ照シテ其病
在テヲ知レトソ但シ拋隣ハ故弱ノ徒才ニホ銀谷ハ百里方
姓ギトリト何レモ先師ノ心識ナリ

本朝文鑑才五

論類

博子論 博知論

解類

念佛解 九品解 養生主解 地重煎解

傳類

正直信傳 藤六坊傳 白狂傳

記類

枕記 白鷗堂記 獅子庵記 往來松記
六廿化亭記



傅子論

東花坊

我亦よに子文と稱する二あり博く子文も此所以
 とすはれは是と論語とこれ論語とすはれは是あり
 言にあり人と此の書とよく言て儒師先代の書籍
 より和漢の語をよひてさすは向ふは是とすはれは
 かく語の深にまていふはかくあはれは言さく
 こととて一字も古人の心とけくともさうは是の書と
 あらうはれはまていふはかくあはれは言さく
 子孫を書とて言ふは是とすはれは言さく

かく語とていふは是とすはれは言さく
 作者の情と汲みはれはまていふはかくあはれは言さく
 言にあり人と此の書とよく言て儒師先代の書籍
 歌き仲孫の斬りては説系とすて釈迦の拈華は是
 といはれは是とすはれは言さく孔子の存を何とすはれは言さく
 了るは是の寓言は此の形容あはれは言さく三聖の腸と着破
 といはれは是の釈迦の孫あるは是の孔子の書あるは是の向ふ
 といはれは是とすはれは言さく語の深にまていふはかくあはれは言さく
 前の或人々儒書仲孫の金銀とすはれは言さく一字の所以
 とすはれは是の或人々も味嚼す油とて是の書香の

ちかれとあまきさんは換ねのほひもまよひあつてもや
 まよひつゝり情子のくはるきよき幸の席にほつちりて
 ちのぬえらへの書よんんささちちよめち認つ何の神よ
 おさちちと後のあふんん配さちちて書物のあつちり
 取らちちたれら南院寺の神蔵よけりこれら神宮海
 の文庫よまなふあし孫百に人の口備とありて神宮
 神宮の婿とこりちち鬼神と感とちち餘情と
 まよひ人向とちちて面白くあつちちなりちち一の
 情より文幸いふまよひのち此通情あつちちやまよひたの人
 へ今世の換のまよひちちまよ世とあつちち世の換と

されて宗よ用ゆわく人向の諸君とけく一野山よとけ
 何もあつ様あつちち一はれち子者のけ論とちち神と
 諸子よまよ一諸君にあつちち一誠よたの所以とち
 ちれちちまよとちちあつちち人向にちちたの世の
 人ちちちてちちわちち一神とちちけ帰よあつちち神と
 ちち人よちちちちち神とちちあつちちちち様あつちち

博知論

西巻坊

神ありおに子よよ表裏の二ありあまよ言語もけちち
 ちちちちちち人の腸とちちちちちちちちちちちちち

武陵の芭蕉庵ありて阿蘇と社津とを伴ふや
 鷓鴣粒と鳳凰枝の平らもあつたあつたあつた
 かく作られたるこふ彌君の註とらるるに詔倒
 競言とて作られたるは元のまゝに奇怪とあつた
 二れと倒語の所以あつたと法おとらるる一人
 ありつたにたれと錯綜顛倒の法と上と下とを以て
 する名人の句法とめとるて轉倒の所以とあつた
 人ありまゝに阿蘇の風流ある百人一それお康と
 され秋野の白露と倒おまをりたれや和屋といは
 あつたと法おとらるる一人ありつたにあつた家の秘お

よまると法おとらるるは元のまゝと秋のゆと上下とを以て
 名人の志とらるとついで倒語の所以とあつた人
 ありつたらく和屋の通情とらるるに社津の和屋と
 ありつたらく錯綜の所以とあつたお康といは元のまゝ
 といつておとらるる倒おまの所以とあつた一人まを博字と
 金銀とらるるて錯綜倒語の法とあつた博字の
 例の和油とらるるて飛法多少の所以とあつた人
 られつた和屋にかつたお人の情とあつたといは元のまゝ
 のうの号といは元のまゝといは元のまゝといは元のまゝ
 のうの号といは元のまゝといは元のまゝといは元のまゝ

舟人のまゝにたゞハ富士のまゝにしてさかばあむ
 らぬのこゝろに白濁々として皎潔はつてさかば
 あしはる西川の駿河あゝ天下すぬの富士は海
 て五ふまの大海いとまきまきたはふひくまは様
 さまんらねと西川の中にもさかばあむのふはさ
 へ様様あまの様のとおむし海は西川の舟あ
 風情をのぞいていあてありまの好と人もあちん
 けふの富士と駿河あゝとす有のありと自讃あん
 又向ふあひくし味とほきまゝ一鬼醜さるにさ煙上
 のまゝらひはとの裾けさるはまゝひめつた人新古今

一判者をくらむ西川の新古今に判者くらむくら
 けらぬ上よとこれ論さあてと人くらむの中
 仰ありとこれれよとまのよと一あまはと命を
 儒仏をそらりけり連絶とさよらる者揚子雲
 う勝とまうて今これ揚子雲と眼とけりくは口巻の表
 とさよらるんらりこ子の裏に針ありの穴ありて
 之皇五帝はなごりてさる一五神七佛はさるらる
 けく一儒佛の家のお根をけりけり此人の形に辨
 してさる一とまゝに論の目のおふと古人とあつた
 けくそのわとけくまゝとの物と換わの詭言あはれ二論

ハ字又の高ひくもあやう

任云此ニ論ハ本ヨリ一篇ノ趣意ナルラ張子有カキ西
ノ銘ニ效イテ東西ニ筆ノ號ラ出セリ去レハ前論ニハ
唐天竺ノ博字ヲ筆ケテ拓華ノ業ヲ其言ヲ知
ラハ儒仏ノ言詔ハ何カ暗カラント但シ南陀寺ト云
龍宮城ト云ル博字ヲ朝ケル任詔ナカラ江州ノ希有
ヲモ取合ハセタリ然レハ其人ラハ白猿ト云イ其我ラハ
岩猿ト云ル例ニ俳諧ノ筆格ヨリ虚實ノ所ヲ見ル
一キナリ後論ハ和漢ノ風流ヲ合ヒテ古人ノ心腸ヲ知リ
タト古人ノ言詔ヲ云ヒタルトノ撰益ノ向ラ云ルナリ

去ハ杜律ニ秋直ノ詩ハ鸚鵡喙餌香稻粒凡几棲
碧梧枝ト其詔ヲ直ニ云フ時ハ枝ノ字ハ支脂ノ韻字ハ
儻ナク凡堪刃心スレ前ニ香稻ノ粒ト云ハ決シテ粒字
ヲ死字ト云レシ次ニ朝康カ化露モ秋ノ野ニ凡吹レク
白露ハト上ラ下ニ置ク時ハ白露ハ幾ニ二粒ニ粒ナラン
然レラ上下ニ轉倒レテ凡ノ吹シク秋ノ野ハト白露ヲ
上ニ持ハセタレハ其野ハ露ノ置乱レテ秋モ厚モ凡ル
ヤウナラン然レハ死活多クサノ四字ヲ以テ魚尽ノ詩ヲ
注シ出セル筆力ノ神ニハ敬慕クレシ況ヤ西行ト著人ノ論ハ
撰佳ホモ同シク判者モ同シキニ兩人ノ喜怒哀各別ナ

多々ニ之仙ノ本情ニ遠クシクハ拈花象持ノ意トテモ千
歳ヲ今ニ見透サシヤニ論ハ總テ所以ノニ子ヲ註シ
テ儒仏兩道ノ至論ナルニ面ノ字ニ又早ヲ散シテ凡ル
人ノ理屈ヲホトキタレニ虚妄ノ文鑑トハ多ク言ヌナリ

解類

念佛解

法慈上人

世々一念十念ノ往生トモトクハ念佛トモ
トハ信ヲ切トモトクハ念ノ持テヨリトモ
トモ一念十念ト不定トモトクハ信トモ
あり信トモ一念ノ生トモトクハ念トモ

一念ト不定トモトクハ念ノの念佛トモ
トモありトモトクハ阿彌陀佛ト一念ト
ありトモトクハ念ノ往生の業トモトクハ

狂云此文ハ一言ヲ誤シモ在リテ此トハ少シ相違アリ
五レハ此段ハ決定ノニ字ヲ解セリトテ信行一致ノ
念仏ヲ示シ玉ヘルヲ誠ニ念ニ一度ノ往生トハ淨土ニ
ノ事云々ニテ十念一念ノ直説ナレシ

九品解

并序

是佛之序

却に東江津の過角ハ其父の業トモトクハ

親師の戒めとありて、一に父の遠慮とありて、
に信仰施僧の善とありて、是等此諸の善向と
ありて、中にも此諸の善の人と九品の位より、その題と
ありて、その日此件とありて、是等此諸の善向
と教文の師とありて、

上品

花

月

雪

釈曰、仏説蓮華經、經ニハ極楽ニ九品ノ差別アリテ、先
ハ娑婆ヲ度メ、座敷論ニモ似タラシク、譬言ハ上ロクニハ無念
無相ノ人ヲ置キ、下ロクニハ分別理屈ノ者ヲ置テ、中品

中品

比丘

比丘尼

優婆塞 優婆夷

釈曰、世ニ四衆ノ供養トハ一家ニモ禱ヲ着シテ、流仏ノ
光ニ蠟燭ヲカ、ヤカシ手作ノ物、此初加子モ、今ノ仏
ニト奉リタルハ、世界ノ人心ノ中、命ト云レシ、今時ニ比丘

比丘尼優婆塞優婆塞夷ハ未挽未折敷ニ居テラ
テ品ヲ弱ノ和ニ因ラ收ハシノ燒豆腐カラレノ女子ニ淚
ヲコホシテ勸ムル功德ハ若ニ成仏ト云言ハルレト
釈迦仰ハ有柄ノ追善ト説キ玉ハ達ユハ二向ニ無功
徳トモコトカレシヤ佛諸宗ニ此等ノ敵トキヲ佛國料理
ト名ラツケテ如何ニモ中令ノ振舞ハルレシ

團子 新茶

下品

釈曰十王ノ勸メモ喰ハラド馬トハ賤田カノ護テカラ仏
ノ五千余卷トテモ此道理ニハ過カラシ去レテ極ホクト

云ト喰ハスハ河ヲ極ホクニシテ喰ケテ極ホクト雷怖テ極ホク
ナリ春ハ花ヨリモ團子ト説セラレ曾々ハ時鳥ノ一語
モ新茶ノ香味覚コト可笑シケレ然モ魂祭ニ心ニ女キ
仏達ナレハ三日ハ喰フタリ飲フタリニテ指シテ雷怖ホトハ
頼ハスカレ珠ニ蓮殿ハ其ナキ勻ラホメテホクノ仏ハ公者ニモ
及ハス手テスルモホ極ホクナリ餅搗ノ比ハ亡人ノ末九夜
トテ魂祭ルワナモ都ニハナキヲ劫後ノ方ニハ獨スル者
トテ之向月ノ母キホラハ豆ト云フモノ附タラシハ彼ノ
毒思モ心ヤハラキテ聖ヨ夫ノ為アレカレトハ思フニシレ
然ルラ仏家法ニ任セテ極ホク下品ニ置タレト佛語

林用文編註

家ニハ上品ノ馳走ト云イテ饒久北四題ノ中ニ酒ト
 者^{ニシメ}大^シ酒モアラハト思フハ叙文ノ御房ノ僻^シ支^シテラシカ
 狂云北^ニ御ハ全ク^ニ靈^ニ誰^ナカラナニ題ノ註解ハ解^シ体^ト云ラ
 一^キナリ^キ去^レハ九品ノ次^ヲ方^ヲニ^ニ或^ハ上品ト^下品ト^ラ
 云イテ中品ハ有^ニ過^ニノニ子^ニ互^ニ照^セル^ル或^ハ朱^ニ梳^ニ朱^ニ折^ニ敷^ニ
 ラ^ニ經^ニ文^ノ詔^ヲ執^カニ^知青^セタル^ル或^ハ下^品ノ四^題ラ^ハ逐^ニ一^ニ
 注^ニ叙^レテ^一カ^ニ樂^ハウ^ラ富^セタル^ル或^ハ八^歳養^育全^ニ祭^ニ
 徒^ニ然^ル州^ノ詞^ヲ備^ツテ^越後^ノカ^ト取^テシ^{タル}況^ヤ結^語
 ノ^狂言^{ナル}比^々作^諸ノ^筆法^{ヨリ}出^テ虚^實ハ^水上^ノ
 胡^盧ラ^轉ス^ニ似^テシ^但是^ハ仙^房ハ^先師^ノ由^ヲ示^ナリ

養生主解

牛老坊

いしより新およこ世相とよおあり千人の鬼ありとふ
 人ありはれと月おの掛灯よりあり隣の花を揺る
 音と津のうさつたれを急のあふとよふと河を
 あねよあふとこくけなれととてとてとてとて人
 とつあふある人ありて和屋の方よりとてとての
 遊をまてつあつとてとてとてとてとてとてとて
 器用よふ及びとてとてとてとてとてとてとてとて
 飛て後よとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

一、その鑑の川牛と能をせりけり利とて能かんに
 人を導く能くして長かんにしるはれし能くしるはれし
 聖人もさききりて論とてさきとて能くしるはれし
 人の利鈍とりてさきさきの能くしるはれし
 腹とてさきさきさきさきさきさきさきさきさき
 法とてさきさきさきさきさきさきさきさきさき
 とてさきさきさきさきさきさきさきさきさき
 もさきさきさきさきさきさきさきさきさき
 はれしとて能くしるはれしとて能くしるはれし

一、その鑑の川牛と能をせりけり利とて能かんに
 人を導く能くして長かんにしるはれし能くしるはれし
 聖人もさききりて論とてさきとて能くしるはれし
 人の利鈍とりてさきさきの能くしるはれし
 腹とてさきさきさきさきさきさきさきさきさき
 法とてさきさきさきさきさきさきさきさきさき
 とてさきさきさきさきさきさきさきさきさき
 もさきさきさきさきさきさきさきさきさき
 はれしとて能くしるはれしとて能くしるはれし

本朝文鑑五

十一

いしし山の東坂と後と嗣の事ありて年あり彼は
 其書好物と云ふ一仲の病根と論して後書と巻とが
 いざり其書の見脈の下とつる凡人の五性あり後
 と心臓の火ふたれは月日のさうとく汗足の汗をさ
 とりて是とと彼の火とをさうせよと彼も此
 とゆきしはうり人ふとさうとさう説かたり人
 の説も通しとさきふたり一説きく物と秘へ物に
 感して本後心端とやういしてはくくかか一と
 時い彼も病のふらういふうとさうとさうい
 病とさういふらうに業いふらうとさうとさうい

茶の病の病と云ふ一言なりあるは粟の種とありて
 ろうくと彼らと種とらうとわい色ありてその
 りあるは病の病のさういふらうとさうとさう
 のふらうたりと暮四のふらういふらうとさうと
 自在にさうとさう病とさうとさうとさうと
 一彼とい後ととねんやとと障已う十の種の内
 うたはのいむと一と醫の業とさうと一傷書を
 の氣とさうの天命とさうのいほりう遠らうと
 の同と猿の星とさうとさうと後書は彼と
 許細ありと一らうとさうの人と生とさうとさうと

の大概よりいへば人の心の中を氣のまゝあつた人の
 心より氣のまゝあつて喜怒哀楽の時の心はあつた
 心とせらば親の子とあつたに似て親の心とあつた
 あつたはと儒師の補筆を添ふて行つた
 心とあつたは心とあつたは心とあつたの部と
 かんじと

往云此解ハ全ク荘子ニシテ在子ヨリモ可笑キ也アリ
 去ルハ之世相ノ重ラシキ長者孫ノ子細ラシキ遺訓ニハ
 金録ノ無用ヲ明シ後書ハ喜怒哀ノ二子ヲ解ス或ハ
 何所テカ生テ居ル人ト云ク或ハ急度馬鹿ニ自注スル

或ハ猿ノ性守トト總テハ在子ト又法ヨリ出テ其ノ格ハ
 齊語志ト云イ道天刑トモ帝縣解トモ皆ク我言ロラ
 以テ古語トナセリ况ヤ聖人君子ヲ嘲ケリテ推人ノ二子ヲ
 形容セル推ハ通テ明ナリト我言ノ字訓ヲ加フシ或解霖
 ニ虚字ノ對ハト命ノ中ノ風流ナカラ鬼神ニ君王ハ能語ノ
 常語ニシテ叙如ク子ノ對ハト仕子ノ過當ナリ然レテ解毒
 ニ似置テモ歩ク先ニ喟ヘタル又筆ノ上ノ奇絶ニノ雲集
 ノ作意ハ神変ト云ヘシ但シ此命ハ在子カ養生至ラモトキ
 テ我朝ノ文章ノ鼓舞ヲナセル和漢ノ通用ヲ見ル
 へシテ故ニ在子カ殆ク字ヲ以テ人向才ノ結語トナセル也

ニ先師ノ文章ヲ稱シテ此等ニ先師ノ虚實ヲ知ルレ但シ
此等ノ文字格ヨリ虚實ヲ誤ルモ亦有ルレシ

地著前大解

桐花角

いづれの搜神書に地著前考といふ地ありてその形は混沌
の如くわづらひの味は醍醐の中におくはく神は是を
初より一切衆生に授けりし神は是とやりけりて
あまの心と化けりてはくはくをばいふまのりや
しー下百鍊子鍛の鉛とあはれりしやと帝釈の
程にありしやそれより皇徳の璠璣の石并にわ

とてし津農ハ解腊の蔵よきくつふまふれは功いん州
と始りて和原の流抄ニ論あはれしやわくこにいおの
あやしとあきて管つとく人のんまはらんや一花園の
のまのきのきおあまを敵りしあはれは神の海
のとをのん人れ園よをいぬて故郷の食と福んはな
い実を地著前考のすまんとこれに注をたすは神
いふくむ一りてこれに羅丹の石内よ張れは公侯の
位ものちしを袍瘡の神とわくはる陽の孫孺子
もいふくむしてまぬ院のおさふまにあれく神平の
まらふれはけしひまの館のうわいさあんとはるといひ

の人れそくをいひて取つてのありしむとひ右鉄買
 比きもこの一ノ首をかゆふにけり富貴にわらはれ
 今もく負賦とくもあつたをいひけりくも厚のりい
 ちよにまをけりく飲の名よりれ秋らおをよのさ
 ち子穢万福のまをわとあつた竹の皮一枚にけり五味
 八珠の腰とくあれておつたまのおひとあるはれ世
 のむふくちよまあおのあつたさつていへ中念や
 此きと部とあつたあんまをく老業子とあつた
 りとて教とよふとくさつたあつた大にの鬼神
 が師走の果の掛とくあつたあつたあつたあつたあつた

狂云此解ハ和漢ノ諸抄ヲ引テ 儒仏ノ教ヲ 歸ニ 喩ヘタル 殊ニハ
 解 体ト云ハシタル 混沌ニシテ 形容シテ 幾多ノ 故言又古語
 用イタル 宙々ハ其ハ 善ニ 其ハ 古又アリヤト 敬馬クシシタル 宗辰子ノ
 狂對ヨリ 或ハ 花紅 翠葉ノ 凡流ナル 或ハ 鬼神ニ 掛テラ 對シテ
 結語ハ 世情ノ 溫和ヲ云ル 誠ニ 俳諧ノ 筆格ヲ 傳ヘ 誠ニ 又法
 ノ 虚實ヲ 知りテ 其ハ 此 作者アリト云ヘシ 但シ 虎角ハ
 相場中ニシテ 依渡ノ 国ニ 往返ス 素生ハ 江東ノ 人ナリトツ
 傳 類
 正直ニ 傳
 西川上人
 ちよ 園とすやん 中比子の 園とあやの 偏比里とち

一人の事はつらきことなりしに
 かくもふくしむるは人の心
 二に云ふに、是れは、
 一は、
 二は、
 三は、
 四は、
 五は、
 六は、
 七は、
 八は、
 九は、
 十は、

保延二年十月十日

の事なりしに、
 一人の事はつらきことなりしに
 かくもふくしむるは人の心
 二に云ふに、是れは、
 一は、
 二は、
 三は、
 四は、
 五は、
 六は、
 七は、
 八は、
 九は、
 十は、

狂云北傳ハ撰集抄ニ在リテ殊ニ世ノ人ノ見覚ト出ルハ
 我固ノ隠逸ヲ稱ス一ク次ニ藤六郎カ傳ヲ合ハスキナリ
 志レハ和漢ノ往生傳ヲ思フニ北業雲天華ハ經者程様
 ニシテ坐脱立忘ハ禪家ノ實活ナラン偶^{タニ}クし佳ホニ此

此を序アリテ曲レルナカラ往生ストハ誠ニ我の宗ノ祖師トモ
 仰クク誠ニ他諸ノ筆格トモ讃スレシ去レテ西行上人ハ
 知テ予ニ其俗ノ風情ヲ尽クシ又至早ニハ虚實ノ自在ヲ
 得テむモ我黨ノ稱スキト吾人ニ此僧一人ナラシカ

藤六坊傳

各馬改

此の因^{イハナ}に定^{イハナ}依^{イハナ}と^{イハナ}る^{イハナ}心^{イハナ}理^{イハナ}の^{イハナ}は^{イハナ}と^{イハナ}よ^{イハナ}ほ^{イハナ}ま^{イハナ}し^{イハナ}は^{イハナ}解^{イハナ}あり
 てその心と^{イハナ}ま^{イハナ}ら^{イハナ}ば^{イハナ}と^{イハナ}よ^{イハナ}ほ^{イハナ}ま^{イハナ}し^{イハナ}は^{イハナ}解^{イハナ}あり
 る^{イハナ}心^{イハナ}と^{イハナ}ま^{イハナ}ら^{イハナ}ば^{イハナ}と^{イハナ}よ^{イハナ}ほ^{イハナ}ま^{イハナ}し^{イハナ}は^{イハナ}解^{イハナ}あり
 解^{イハナ}の^{イハナ}よ^{イハナ}と^{イハナ}ま^{イハナ}ら^{イハナ}ば^{イハナ}と^{イハナ}よ^{イハナ}ほ^{イハナ}ま^{イハナ}し^{イハナ}は^{イハナ}解^{イハナ}あり

此の^{イハナ}れ^{イハナ}程^{イハナ}と^{イハナ}求^{イハナ}ら^{イハナ}し^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}後^{イハナ}に^{イハナ}の^{イハナ}價^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}
 こ^{イハナ}の^{イハナ}内^{イハナ}に^{イハナ}し^{イハナ}り^{イハナ}て^{イハナ}一^{イハナ}体^{イハナ}の^{イハナ}う^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}極^{イハナ}の^{イハナ}ま^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}
 こ^{イハナ}も^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}西^{イハナ}の^{イハナ}人^{イハナ}目^{イハナ}と^{イハナ}し^{イハナ}る^{イハナ}を^{イハナ}例^{イハナ}に^{イハナ}
 あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}
 あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}
 近^{イハナ}に^{イハナ}遠^{イハナ}に^{イハナ}帰^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}
 と^{イハナ}市^{イハナ}の^{イハナ}子^{イハナ}を^{イハナ}ら^{イハナ}ぶ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}
 名^{イハナ}と^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}
 何^{イハナ}と^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}は^{イハナ}あ^{イハナ}ら^{イハナ}ぬ^{イハナ}
 こ^{イハナ}の^{イハナ}心^{イハナ}と^{イハナ}ま^{イハナ}ら^{イハナ}ば^{イハナ}と^{イハナ}よ^{イハナ}ほ^{イハナ}ま^{イハナ}し^{イハナ}は^{イハナ}解^{イハナ}あり

と云すのわに一集ある人け指はる一丁五世の
ころあふふしひあふはらうに仲もはらうらあひ
あふふしひあふはらうと教誨と一詞とけいひ
とあふふしひあふはらうとさかふとさかふと
字所しけふとさかふと

ね云北傳ノ法師ハ凡骨ヲ離レテ世ノ眼力ニ及サラシキ唐ノ
傳灯録ニモヤ名ノ隱逸傳ニモ北如キ狂僧アリテ或ハ
賢人トモ狂人トモ傳寫ノ儀表ニ依ルキナリ誠ニ孔子
春秋ハ百世ニ準ルキ筆法ナラヤ或ハ湖明ト西行トハ
和漢ノ風人ヲ取合セ或ハ一体ト増加トハ言ニ狂僧ノ類

ヤラシ然ルヲ教誨ノ二字ニ依ラハをモ市中ノ大隱氏祐ス
一但し作者ハ各執ギニテ美濃ノ山縣ノ三生ナリ

白狂傳

東老坊

白ねとて處をうらあふは世と或は狐の子なりと
うらあふはうらあふとやもよるさむらあふの山寺のお
所くねるおらうらあふ秋のまあうらあふ年のわしうら
あふらあふ三喜部の人れに精鏡とおひつらあふ鐘樓
のほらあふはあふ何んちうてあふらあふはらあふと
のねらあふあふらあふはらあふはらあふとせあふ

いふれあれふら川をさよとてゆくありわたりてかくら
 らしきとて流るりて舟をなぐりてわたりぬるるに
 とありて十知の入りありて舟を韓向ふきこもあつて一玉と
 してさきと歸とちよてはるに韓愈の風骨とわたりて
 謀かある時いふ老坊の能治とよらひてその口能の能
 とていふに我よく治す能治とて治を我よく治す別
 のふありはるらるるの變化ありて變化の人とてさ
 ぬらりてこやの獅子庵の能治の能治とらるるに
 年いふて馬政東羽もなふれと右の能とさく下
 とていふてかくく野航の能治もやあつてさ

今てて行道の行人もいふはる白狂のてよとあつて
 今てて行道の足牙もいふはる渡部ワタベのてよとあつて
 是とて行道の別姓もいふはる角部の時とあつてはる
 骨柄コツカもいふはるいふはる中あつてはるさつてはる
 渡部狂もいふはる名もいふはる渡部のてよとあつて
 宗名もいふはるいふはるいふはる狂のてよとあつて
 行いふはるいふはるいふはるいふはる儒のいふ
 行へと遊戯自在なていふはるいふはるいふはる花周
 ちとていふはるいふはるいふはるいふはるいふはる
 行いふはるといふはるいふはるいふはるいふはるいふはる

訪人の言にわひ言人の言よおふまよひと酒とわひ言
 んふふちれきふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 ちの歌あふく人よわひの嬉酒の或あふくちの
 ちふふちれきふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 中ふふちれきふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 られふふちれきふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 一人向言の女ふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 ふ十餘のけふふちれきふふちれきふふちれきふふち
 官右のち鼓とふれ及ふちれきふふちれきふふちれき
 世々も一過不及とふれ及ふちれきふふちれきふふちれ

こわふふちれきふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 ふふふふちれきふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 ふふふふちれきふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 の人ふふちれきふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 神ふふちれきふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 ふふふふちれきふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 俳諧ハレこれ機ふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 くふふちれきふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 ハ在ふふちれきふふちれきふふちれきふふちれきふふ
 下ふふちれきふふちれきふふちれきふふちれきふふ

う一とさく色蕉乃の一脈よりけりけりははるなり
 蕉乃よと世の正統ありし和乃よと世の阿難ありし
 師法はこれなりしなりきりきりし一にたかたりこれの
 不れふんしとや呪や呪のつよとまらうてねふに
 七化のおる來と來きと歸ふに一言の御説と流し
 けりさるへき富山の白ねありてと天下の人よとれ
 へくハはと新道の義未衣と夫のてけハ海達ナダチ
 而月と心はらんやけり傳のこまとけりて直音
 の傳とてつよと新文よおるるは海達ナダチ一
 狂云此傳ハ班固カ論其クモ似タラシ去レハ此傳ニ名判

林泉文庫

卜瑞酒ヲ分ケテ其ニ狂フト今狂フトハ儒仁モ説カル所
 ニシテ誠ニ其家ノ方言ト云ハシ或ハ人間ノ長モラ對レ
 虚ナレハ念ニ實ヲ云ハテ實ナレハ却テ虚ヲ云ヘル句對子對
 ノ自在ヲ結スヘシ但し又ハニ線ナヒセニトハ本ヨリニミムメノ通約ニ
 テ線ト線トノ和語ヲ知ルハ或ハ又文章ノ法格ヲ免セ凡
 辭語ノ様々ヲ免ガハ古今ニ俳諧ノ要言ニシテ前モ後
 化ノ人ヲ待スト云ヘル有尾ノ文法ヲ見ルキナリ埒ニテ標識
 ノ者又理ヲ云ヘル多ニ師因ハ流ヲ採ルハ或ハ和乃ノ阿難トハ
 此傳ノ中ノ骨節ニシテ白狂ノ二字モ孤ノ二字モ念ニ骨節ヲ
 拂ツテ有破スヘシ但し黄山ハ先師別在ニメ白狂カ子又所
 たり

林泉文庫

記類

枕記

貞室

敷の枕を床の間に作りてをら思すのの
 一にちかきとちかきけ角とせしむる
 寝の月をねしけ枕のふとちかき
 も是とせしむるや本とせしむる
 形とせしむるおとけり
 とよきけりい国の音人れよ
 二川の枕と求てたるありて

業の本に園枕をねしけり
 ひの清く方石をねしけり
 夕の山をさす女のねしけり
 いじりくと肥丁膚のまら
 より傍るぬる色ゆる
 むらむるねしけり
 園枕をさす窓よまら
 孫書よまら
 耳とはらむる為と

本朝文藝五

幸と申凡と物々石と頸物史とゆふさびとあり唯
らうせとやあはばるれあふさばうさうさうさ
或は之りのなまりてし二松とあや—こし後田あり
やらうさびとあに記とかいなる人うさうさ

お云い記せして傳字して正馬の誤モ有ルキカまして

此老人ハ俳諧ノ中興ニシテ芳野山ニ化ヲ詠レ偶田川

ニ鳥ヲ吟ス當時正岡ノ祖ト云レ然レニニサノ各ニ寄

セテ方圓ノ松ヲ形容セル老人雷怖覺ノ筆集占ナカラ後

ノツフリノ結語ニ到リテ虚實自在ト修スレ但シ此老

ハ晩年ニ俳諧ヲ知ルカ自己ノ短冊ヲハ焼捨ケルトソ

白鶴堂記

おのれ丸

一室ありのびと名とけをそいのふちす群とあふれ
るしきの海ものつて清濁ありて世とさわて雨に
眠てくと暮らさむとさうかいてやれぬあふた境
入外ときめかうも一本とせしつかわてお湯ふれるの
おちりばふさむねらね入荆棘のらさぬくしあふ
實に揃えんや此書とわすは十一枚のねひはり一本
田方のおとくさくさく他人の助力とゆえり自然の
ふりりしはいやうさうさうさうさうさうさうさう

白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに

白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに
 白くつらきと野々村、乾坤のまはらばらに

ちのへはしりし道徳のし百身と異個としりしついで
 一人てあしとくしりしついでしりしついでしりしついで
 ありしついでしりしついでしりしついでしりしついで
 道のついでしりしついでしりしついでしりしついで
 中絶せぬのはついでしりしついでしりしついで
 誰とむしりしついでしりしついでしりしついで
 もついでしりしついでしりしついでしりしついで
 俗務のしりしついでしりしついでしりしついで
 への歎情、年へしりしついでしりしついでしりしついで
 人のついでしりしついでしりしついでしりしついで

ちのへはしりし道徳のし百身と異個としりしついで
 一人てあしとくしりしついでしりしついでしりしついで
 ありしついでしりしついでしりしついでしりしついで
 道のついでしりしついでしりしついでしりしついで
 中絶せぬのはついでしりしついでしりしついで
 誰とむしりしついでしりしついでしりしついで
 もついでしりしついでしりしついでしりしついで
 俗務のしりしついでしりしついでしりしついで
 への歎情、年へしりしついでしりしついでしりしついで
 人のついでしりしついでしりしついでしりしついで

町の自由ありてはたしむる所ありと云ふは、
此の自在ありてはたしむる所ありと云ふは、
と感とてはたしむる所ありと云ふは、
此の自在ありてはたしむる所ありと云ふは、
と感とてはたしむる所ありと云ふは、

狂公此記ハ殊ニ虚實ヲ得テ誠ニ和音ノ遠徴ヨリ誠ニ柳詒
ノ戲詠アリ去レハ白鴉ノニ子ヲ以テ一張ノ紙帳ヲ形容セ
始ハ橘先生ノニ子ニホノカシ終ハ紙帳ノニ子ニ頭ハ此等ヲ
麓頭ノ格トヤ云キ或ハ一篇ノ文章ニ兩所ニ四ノ鳥
ヲ云ヘル前ハ因テノニ子ヲ陳スヨリ紙帳ニ四ノ鳥ノ風流ヲ

寄セテ況ヤ夏ノ夜ト其ヲ思フ子タル文ニ文中ノ文アリト云
後ハ庭ノニ子ヲ梅柳ノ四ノ鳥ヲ云ハ總テ堂中ト堂外ト
ニ兩様ノ化鳥ヲ分ケテ前ハ四ノ鳥ノ情ヲ云イ後ハ四ノ鳥
次ヲ云ヘル兩処ノ用ヲ見キナリ殊ニ四ノ鳥ノ詠詠トメ春ヲ
迎ルト肩捨テ四ノ鳥ノ次中ノ行ワラセラル但シ文章ノ一休ナラ
或ハ御書ヲ待心トハニ子ノ道途ニ待ノニ子ヲ倚ワテ團扇ノ
風ヲ扇ナレルヨリ和漢ニ古詩ヲ摘ミ古詩ヲ採リテ其
ノ故書ヲ用イタル讀人ノ容易ニ看過ス一カラス然レハ此記ノ
結文ハ昔者カ水仙ノ云鬼ヲ招キテ美色ノ戯シラ合セ
ハ前ニ習テ比フキトモ其ハ佛ノニ子ノ係ヒテトモ愛別情

本館文庫五

二十六

ヲ舎メタレ作者ニ節ノ意アリテ音ヲ思ハル人ナランヤ
 け故ニ其後ト云ヨリ桓王ノ遊ヒニ美酒佳肴ヲ設テ水仙
 三鬼鯉ヲ待リ処ニ思イモ寄ラ又法師ヲ出シテニり大記雖
 陳ヲ毀シ高唐賦ノ虛實ニ效フ室ヲ俳詠ノ筆格ト
 シテ詩音ノ文法ヲ令セリト祐スレ但シ作者ハ接ノ伊丹ニ
 三産シテ本林氏ノ隱者ナリ前ノ在園モ伊丹ノ別号トナリ

椰子庵記

東老坊

椰子庵の椰子はさつれの意ありしつらいつのにおよびり
 了りともう次まうん在園の世とはもさう何有の

郷のちからやあらん或は梅檀の林よりわたり骨傳の位
 とゆいりいりいりいりいり或は牡丹の花よあそびいりい
 のふとわけんいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 りのおれいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 かのさつれのおのふにすつらうのすつらうとすつらう
 長春よはらういりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 やさうらういりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 してんえいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 くれいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり
 流もさういりいりいりいりいりいりいりいりいりいりいり

大用文鑑五

二十七

人行く者の程くもはつてもいふはむかし御よから牡丹の御
 も赤ちの御一節とていふはあかあかあかといふ御よをい
 波の御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 の御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 と御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 ねと御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 もよの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 の御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 の御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 の御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ

へ老とていふはむかしもいふはむかしもいふはむかしもいふはむかしも
 いらふる御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 ちむしむの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 こいふはむかしもいふはむかしもいふはむかしもいふはむかしもいふは
 御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 こいふはむかしもいふはむかしもいふはむかしもいふはむかしもいふは
 ちむしむの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 の御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 の御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 の御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ
 の御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よの御よ

ありて可あの花蓮花とよまわん可あの花とよまわん
 こころ二庵とよに一花あふん一庵とよの庵とよ
 と二口よの記二行ありとよまわんとよまわん
 いろはの庵にたの長門の庵とよまわん
 いろはの庵とよまわんとよまわん
 いろはの庵とよまわんとよまわん
 いろはの庵とよまわんとよまわん
 いろはの庵とよまわんとよまわん
 いろはの庵とよまわんとよまわん
 いろはの庵とよまわんとよまわん
 いろはの庵とよまわんとよまわん

和云此記ニ故夏古詔ヲ用ル夏惣テハ七ハ五夏アリテ
 種々ノ文格ハ有ナカラ先ハ頓挫ノ法ト云ヒヨリ一先師
 ノ句對字對ハ例ニ先師ノ筆格トレト竹ニ雀ノ個又ニ

至リテ見ル者ハ夏ニ絶倒スレテハ七ハ五夏アリテ
 心トムナトハ西行ノ詞ニ寄セテ且次ノ二句ヲ云イナセル是雙角
 法ト見ルレシ或ハ梅檀ノ獅子ニ禪録ヲ用イ或ハ無數蓮
 花ニ仏性ヲ出セル但シ一東花ハ東坡カ詞ヨリ天地東坡
 ノ響音ナラン去レハ此等ノ寄第ハ中句ニ古郷ノ獅子庵ヲ
 記シテ哀毛ノ二情ヲ看ナセル此等ヲ二重實ノ文鑑ト
 云イテ誠ニ千視万聽ニ飽サレシ

往來松記

ふかき

これ國加ゆの海の西ノ一本の松ありてその里に

よりいかにの言と月まといふものあり一様ぬ弊て
龍蛇の扇曲とるらわらふも嵐らわらふもあつて
あつていふもと^{ズキ}行東のねこつた海とあるもの伝
ふありて又官武将の言詠とてそ歌人は僧の口號
とありといふらふらふといふらふといふ武將は
のねこつた海とるらわらふも嵐らわらふもあつて
はくとも嵐らわらふも嵐らわらふもあつて
のこつた海とるらわらふも嵐らわらふもあつて
ちかちかしてありありの月とるらわらふも嵐らわらふもあつて
添れてしゆく福をたのめよあつてねこつた海とるらわらふも嵐らわらふもあつて

はくとも嵐らわらふも嵐らわらふもあつて
ねこつた海とるらわらふも嵐らわらふもあつて
ちかちかしてありありの月とるらわらふも嵐らわらふもあつて
添れてしゆく福をたのめよあつてねこつた海とるらわらふも嵐らわらふもあつて

ね云北記ハ賦ニシテ記体ナリ去トハ教箇ノ各所ノ中ニモ
宗祇ノ梅ハ鏡鳴乞津寺ニ発身リテ智通ノ杖櫻ハ
西ノ井ノ立政寺ニ名ヲ残セリ或ハ江ノ津ナトハ天文ノ比ノ

古戦場ニテ伊吹嶺東ハ富田ノ各勝ナリ然ルニ遠寺
ノ櫻丈ヲ桃李ノ蹊ニ云イ寄セタル定ニ永郊ノ白雲
爰ノ初雪ニ給ヘタル珠ニ顧况カ子規ノ詩ヨリ往來ノ旅人
ノ情ヲ駐メタル總テハ和漢ノ故吏古語ヲ用ルニ應用
自在ノ文筆ト稱スレ然ラテ結語ハ我國ノ各松ヲ借テ當面
ノ松ヲ答言セル此等ヲ不根ノ持論ト云ヘシ

西女七亭記

西女七帖

此亭北名と云むと云ふより北名といふ所の北名といふ
て時南亭に對しきより北名といふ所の北名といふ

おそれおぼゆると云ふと云ふはあつていふあはれと云ふは能
と云ふ和音とあつていふと云ふは禪法ノ佛性より
わづ念佛といふありのち禪法ある能性もわづ
よりわづ連なりといふありのち能性ありは及青龍
よりわづよく氷を氷よりあてと云ふは一なる重なり
よりあつていふよりいふなりと云ふは例は能性の可別
と云ふて云々の趣と云ふは云々の事也なりもまにん
と云ふはわづいあつていふ盤なりて云ふはつていふは
たのむ別と西女帖よりわづい神と西女帖よりわ
中く富きといふのも也

和云此記ハ例ノ筆拾ナカラ無心所着ノ体トモ云カ但シ
 六老ハ雪ノ異名ナリト云レハ六老ノ二字ヨリ起リテ時雨
 ノ二字ニ對シタル教禪ハ其カ喻ニテ連テ奇ト能ク
 争フニ似タレト畢竟ハ雪ノ時雨ニ勝レリト稱シテ貧富
 ノ勝劣ハ文ニ早ノ虚實ナリ但シ此年ハ伍ノ下注井
 ニ在リテ般並古ハ其主ノ能名ナリ



相州川入
 五雲井
 槐堂藏書

